

美術の窓(109)

よし わらしゅんじゅう

けい ぶつ

吉原春秋二度の景物

大和文華館館長 浅野秀剛

久しぶりに吉原物の論文を書いた。

国際浮世絵学会の機関誌『浮世絵芸術』が吉原特集を組むことになり、私に、吉原と浮世絵に関する論文を書くようにという要請があったので、「吉原俄の錦絵—安永期から寛政四年まで」という論文を書いた。安永4年(1775)に再興された吉原俄は、翌5年頃から錦絵(完成された多色摺版画)にも描かれるようになり、文化期(1804～18)まで続く。吉原俄とは、江戸の官許の遊廓である吉原において、毎年8～9月に、男女の吉原芸者を中心に禿(遊女の世話をする少女)なども加わり、即興劇や踊りをしながら廓内を練り歩く行事で、一種の仮装行列、祭礼の付祭のようなものである。

吉原は男性だけでなく、女性も子供も誰でも自由に入ることができた。したがって、俄のような行事には普通の人が大勢見物に押し寄せたのである。俄の費用は吉原の遊女屋を中心とする町内で負担するのであるが、最終的には、客の負担となることはいうまでもない。乱暴な言い方をすれば、毎年長期に互り遊客が負担する祭礼が行われ、それを江戸の人々が楽しんだということになる。吉原が単なる遊廓ではなく、文化の発祥地でもあったというのは例えばこういうことをいう。

吉原俄の錦絵とは、磯田湖龍齋画「青楼俄狂言 助六 白酒売」(図)のようなものである。これは昨年調査したギリシャ国立コルフ・アジア美術館所蔵の

作品(7月4日から9月6日まで江戸東京博物館で展示)で、従来知られていなかった、いわば新発見の作品である。安永5年3月市村座で二代目市川八百蔵の助六、四代目松本幸四郎の白酒売で「助六所縁はつ桜」が演じられて大当たりとなった。翌安永6年の大芝居では助六の狂言はなく、7月3日に八百蔵が43歳で亡くなった。この図は安永6年秋の吉原俄の折、その八百蔵を惜しむ追善の意も込めて演じられたものと推察される。俄に限らず、吉原物の浮世絵の制作年代の考証などをするときの基本文献は毎年春と秋に刊行された『吉原細見』というガイドブックである。この図でいえば、松葉屋の「さゝの」と「松の」という禿の名を『吉原細見』から探し出すのである。しかし、代替わりして長期に亘って載っていることも少なくないので、それだけで制作年代を絞り込むのは難しい。そんな時、俄の度に刊行された絵入の冊子や、演目・出演者などを記した番付があれば便利であるが、残念なことに吉原俄の冊子や番付で今日まで伝わるのは非常に少ない。幸運なことに安永6年の俄の折に出された『明月余情』3冊が現存しているので「青楼俄狂言」のシリーズの制作年が確定できたのだが、それは稀なケースということになる。

吉原俄の冊子や俄番付と照合できない場合は、随筆などの史料を探さなければならない。吉原俄に関する随筆には『吉原春秋二度の景物』というもの

が知られており、幸なことに『未刊随筆百種』という叢書に活字化されている。今回は、当然、その史料も用いなければならない。しかし、活字化された『吉原春秋二度の景物』を詳細に検討すると、どうもおかしい。間違いあるいは勘違いではないかという箇所がいくつか出てきたのである。気になって仕方がないので、東京に行った時、原本を所

蔵している国立国会図書館に行き、活字本と照合した。果たして、冒頭の「寛政二午年浅草観世音御開帳の時」が原本では「寛延二午年浅草観世音御開帳の時」となっていた。寛政二年(1790)と寛延二年(1749)では41年も違う。原本に当たる重要性を改めて痛感することになったのである。

図 磯田湖龍齋画「青楼俄狂言 助六 白酒売」
(ギリシャ国立コルフ・アジア美術館蔵)



季刊 美のたより No.167

平成21年7月3日

発行 大和文華館